

無意識のうちに無関心

沖縄県立那覇国際高等学校二年 山田 愛莉

昨日、私は世界を一人殺したのかもしれない。もちろん、誰かに手をかけたわけではない。ただ、スマートフォン画面越しに、一つの人生を「なかったこと」にしたのだ。指先一つでニュースをスクロールし、の中で泣き叫ぶ子供の姿を、無意識のうちに視界から消し去った。そのわずか数秒後、私の目は友達が投稿した美味しそうなパンケーキの写真に釘付けになり、数秒前の光景はもう、記憶の隅から消えていた。私の指先が、一人の人間の叫びを忘却へと突き落としたのだ。私達はこんなにも簡単に遠くの誰かの絶望を「見なかったこと」にできてしまう。この静かな無関心が、実は銃声よりも残酷な、平和を壊す引き金となっているのではないか。

現在、世界では多くの紛争が続いている。ウクライナ、パレスチナ・ガザ地区、そして「忘れられた戦争」と呼ばれるスーダンやミャンマーの情勢。ニュースでは、犠牲者の数が「数字」として報告される。「死者数100人」「避難民1万人」私達はそのあまりに大きな数字に圧倒され、麻痺してしまっている。しかし、その数字の「一」の中には必ず一人の人生がある。私達と同じように、学校に通い、友達と笑い、将来の夢を語り、温かい夕飯を待っていたはずの人々の当たり前の日常だ。

そんな中、パレスチナ・ガザ地区から発言されるSNSの中に、あるメッセージを見つけた。それは、死の淵に立つ多くの若者達が共通して世界に投げかけている叫びだった。

「もし僕達が死んだら、僕達が人間だったことを忘れないでほしい。」この言葉に、私達は衝撃を受けた。それは、自分達が単なる数字やニュースの一場面として忘れ去られていくことへの、魂の叫びのように聞こえた。彼らも私達と同じようにスマートフォンを使い、SNSで世界と繋がり、大切にしている家族があり、叶えたい夢を持っていたはずだ。そんな若者達が、死を目前にして唯一願ったことが「人間として記憶されること」だったのだ。昨日私がスワイプしたニュースの奥にも、この叫びが隠れていたのかもしれないと思うと私は何もできないままだった。

なぜ私達は、これほどまで無関心でいられるのか。それは、私達が「平和」という温室の中にいて、外の嵐をガラス越しに眺めているからに他ならない。心が壊れないように、脳が無意識に「自分には関係ないことだ」というフィルターをかけているのだ。しかし、この「関係ない」という思い込みこそが、最も危険な暴力の種になるのではないだろうか。

かつて、ナチスによる大量殺戮から生き延びたエリー・ヴィーゼル氏はこう言った。

「愛の反対は憎しみではない、無関心だ」と。憎しみはまだ相手を人間として認識しているが、無関心は相手の存在そのものを否定し、消し去ることである。私達が遠い国の悲劇に背を向け沈黙し続けることは、間接的に「その悲劇が続くことを許容している」ことと同じではないか。

さらに、私達の無関心は単なる心理的な問題に留まらない。私達が日常で使っている安価な衣類、スマートフォンの部品に使われる鉱物。それらの流通経路を辿れば、その利益が紛争の資金源になっていたり、過酷な労働搾取の上に成り立っていたりすることがある。私達は「平和」な日常を享受しているつもりで、実はその平和の欠片を誰かの犠牲から削り出しているのかもしれない。

では、私達高校生に何ができるのか。銃を止めることも、政治を変えることも、今の私達には不可能に近い。しかし、たった一つできることがある。それは「無関心」という壁を突破し、知ろうとし続けること」だ。

平和とは、単に戦争がない状態を指す言葉ではない。平和とは、自分とは違う場所で、違う痛みを抱えている誰かの存在を、想像し続ける「努力」そのものであるはずだ。ニュースをスワイプする指を一秒だけ止めてみる。そこで見た光景を、家族や友達と話題にしてみる。自分が手にしている製品の背景を想像してみる。こうした小さな「関心」の連鎖こそが、世界を覆う無関心の壁を突破する唯一の手段だと私は信じている。「世界平和」という言葉は、あまりに大きすぎて自分一人の手には負えないように感じる。けれど、隣にいる友達の痛みに気付くこと、そして海の向こうで泣いている誰かの存在を忘れないこと。その積み重ねの先にしか、本当の平和はない。

私はもう、昨日までの自分には戻りたくない。画面の向こうの叫びを、他人事としてスワイプして消すのではなく、一人の人間として正面から受け止める。そこから私の「平和への歩み」を開始したいと思う。皆さんも、その指を止めて、世界を見つめることから始めてほしい。無関心という名の引き金を引くのをやめ、想像力という名の架け橋を架けるために。